Her Own Way しなやかな闘い

［鑑賞ガイド］

ポーランド女性作家と映像
1970年代から現在へ
Female Artists and the Moving Image in Art in Poland: From 1970s to the Present

I

限られたアクセスのなかで
パイオニア世代の映像実験｜1970-1980年代

1　エヴァ・パルトゥム
《ドローイングTV》1976年

テレビ画面をフィルムで撮影した映像です。ニュース映像が流れるテレビの画面に、フェルトペンで、○や×、縦横に線をひくなどして、その様子を映画フィルムで撮影しています。

- **なぜ、テレビ画面を映画フィルムで撮影しているのでしょう?**
- **当時のポーランドでは、どんなテレビ番組が放送されていたのか想像してみましょう。**

西側諸国では1970年代には既に、ヴィデオを用いた実験映像作品が作られていましたが、同時期のポーランドでは、ヴィデオ機材へのアクセスはきわめて限られていました。個人のアーティストが扱うことができたのは、8ミリや16ミリの家庭用映画カメラだけだったのです。当時ポーランドのテレビに流されていたのは、共産党の指導管理のもと制作された番組ばかりです。テレビの上に図形を描くという一見抽象的でコンセプチュアルにみえる行為には、指導者が唱えるプロパガンダ色の強いニュースに介入するという政治性がはらまれています。

2　ナタリア・LL
《消費者アート》1972年・《インプレッションズ》1973年

若い女性がバナナを食べようとしている写真と、女性の上半身をクローズアップで撮った映像です。どちらも1970年代前半に作られました。

- **これらの作品からどんな印象を受けましたか?**
- **これらの作品は、1970年代当時のポーランド社会で、どのように受け取られたと思いますか?**

バナナは、今では簡単に手に入る、安価で庶民的な果物というイメージですが、当時のポーランドではぜいたく品でした。高級で甘美な果実を消費する悦びを隠そうとしない女性像は、性的な連想を誘うこともあいまって、保守的な当時のポーランド社会が求める理想とはそもそもかけ離れたものでした。《インプレッションズ》のように、女性が自ら撮影した官能的な身体を、公共の場で見せることへの抵抗感も強かったことでしょう。現代では、さほど過激に見えないナタリア・LLのこうした先駆的な作例は、1960年代の終わり頃から西側諸国で台頭してきたフェミニスト・アートの文脈と連動し、東西のアートシーンをつなぐ役割を担いました。

3　ヨランタ・マルコラ
《キス》1975年・《ディメンションズ》制作状況、1975年

《キス》は、女性が画面の向こうから、投げキッスを送ってくるというシンプルな身振りの映像です。《ディメンションズ》は、ポーランド初の女性作家によるヴィデオ・アート作品です。

- **映像をループ状につなぎ、反復して見ることで、内容の見え方はどう変わると思いますか。**
- **写真やフィルム映像と、ヴィデオ映像の最大の違いはどこにあると思いますか?**

《キス》は、最初からギャラリー展示としてループ上映するよう意図されていました。自らカメラの前に立ち、その向こう側にいるはずの不特定多数の人の視線にむけてアピールをする映像は、現代のセルフィー文化にも通じます。作者は、テレビ局のスタジオでインターンをする機会に恵まれ、テレビ番組の制作現場や放送のありかたを分析した学位論文を書きました。テレビ放送の現場を体験したことで、フィルム撮影とは違うヴィデオの特性、つまり撮影するのと同時に映像を受像機に送信することができるということを、的確に理解したのです。残念ながら作品自体は現存していませんが、1975年には、ポーランド女性作家として初のヴィデオ・アート作品《ディメンションズ》を手がけています。

4　ヤドヴィガ・ジンゲル
《ジ・エンド、ジ・エンド》1979年

そっくりな二人の男性が食事をしている映像です。よく見るとどうも何かがおかしいようです。

- **この映像はどのように撮影したと思いますか?**

片方の男性の映像は、一度撮影したフィルムを左右反転し、逆回転するかたちで合成したものです。作者は、当時複数のフィルム作品を手がけた記録が残っていますが、現存するのはこの作品だけです。彼女はカトヴィツェの美術大学で、1975年に設立されたグループ〈プレゼンテーション技法研究室LTP〉の中核メンバーでした。カトヴィツェ美術大学には、ヴィデオ機材はありませんでしたが、別の大学が、導入したもののあまり使っていなかったというスタジオ設備を利用してヴィデオでの実験も行いました。

5　バルバラ・コズウォフスカ
《視点》1978年

現存しない映像作品を記録した複数の写真です。女性が、

床に横たわり、手足を伸ばし広げている様が、モニター上に映し出されています。その様子を別室にあるモニターで観客が見ています。

・どんな映像だったか想像してみましょう。

この時代の作品の多くはすでに失われ、その存在は、断片的な記録を丁寧に読み解き、想像するしか、理解する術がありません。作者のとっているポーズは、レオナルド・ダヴィンチの有名な「人体比例図」を参照しています。

6　イザベラ・グストフスカ
《相対的類似性》1980年

3組のふたごをめぐるフィルム作品です。作者は、多様な状況下にふたごたちを置き、その変化の記録をとりました。

・姉妹同士の差異や類似性について観察してみましょう。

自身もふたごの姉妹の一人として生まれた作者は、このテーマを長期にわたり探求してきました。後に作者は、このふたごをめぐる考察を、ヴィデオの特性に結び付けています。映像を介して分裂したもう一人の自分をその場で見ることを、ヴィデオは可能にするからです。

7　アンナ・クテラ
《対話》1973年

女性が街角で道行く人に、声をかけています。音声はないですが、「こんにちは(dzien dobry)」、「紹介(Prezentacja)」、「何時(któla godzina)」といったテロップで、何を話しているかが大体わかります。そして、最後の質問では、「アンナ・クテラ通りはどこですか?(gdzie jest ulica anny kutery?)」と聞いているようです。

・撮影者はどこにいるでしょう?

・この作品で想定されている観客はどこにいる誰でしょう?

この作品は、公共空間における行為(アクション)を、映像で記録することで作品化する先駆例のひとつといえるでしょう。隠し撮りされている映像は、その場にいない不特定の誰かを観客として想定して作られます。舞台になっているにはヴロツワフの街区で、この辺りの通りは、有名な芸術家にちなんで名づけられていました。作者は、女性作家である自分の名前がついた通りはどこにあるの?と道行く人に聞くことで、そうした名誉が男性芸術家のみに独占されていることへの異議申し立てをしています。その問いは、映像として時空を超えて現在の観客へも、今なお投げかけられているのです。

8　テレサ・ティシキェヴィチ
《息》1981年

女性が、真珠玉や毛皮、肉片などさまざまな素材をもてあそんでいます。カメラは、被写体である女性自身へも、親密な近さで肉迫します。

・映しだされる素材それぞれの質感を見て、どんな気分になりましたか?

撮影しているのは、作者ティシキェヴィチの、創作と私生活両方におけるパートナー、ジヂスラフ・ソスノフスキです。愛し合うカップルの親密な関係性を、さまざまな素材を用いた即興的な身振りや構図によって、官能的に表そうとしたのだそうです。それぞれの素材は、見る人の感覚を生々しく刺激するために選ばれています。この作品の作者名はティシキェヴィチですが、パートナーが撮影するカメラの前のティシキェヴィチの姿には、個性や感情はあまり感じられず、受動的な被写体に留まっているようにも見えます。

9　イヴォナ・レムケ＝コナルト
《人間の可能性の限界》1984年

壁の前で、女性がヨガの坐法を思わせるさまざまなポーズをとっています。それぞれのポーズにあわせて、壁に線が引かれていきます。やがて、その線が何を意味していたのかが明かされます。

・女性は何をしているのでしょう?

この作品を撮っていたとき、作者は妊娠初期だったそうです。妊娠という自分の身体に起きている変化を、日々体感するなかで、自身の内にある自然と、周囲にある世界とが一体に感じられていたのかもしれません。メディアそのものへの関心というよりも、自己の主体性や身体性を客観的に再確認する道具として、映像技術を使っています。

II–1

転換期
クリティカル・アート潮流とともに｜1990年代以降

10　ユリタ・ヴイチク
《芋の皮剥き》2001年

女性がひとり、美術館の一室に座り込んで、ひたすらにジャガイモの皮むきをしています。着ている服は社会主義政時代のポーランドで1970年頃に多くの女性たちが来ていたスタイルです。

・美術館にきていた人たちは、どんな反応を示したでしょう?

・この作品で、映像はどんな役割を果たしているでしょう?

ジャガイモは、ポーランドでは主食の一つ。イモの皮むきは、女性たちが昔から行ってきたさまざまな家庭内での労働の象徴といえるでしょう。ユリタ・ヴイチクは、美術館や美術を普通の人々に身近なものにしたいと考えて、誰もが知っているありふれた行為を、あえて美術館という公共空

間の中に持ち込みました。1回限りのパフォーマンスも、映像記録を作品として提示することで、より多くの人と共有することが可能になります。

11　ズザンナ・ヤニン
《闘い》2001年

白いリング上で、女性が大柄な男性とボクシングをしています。力や技量の差は見るからにあきらかですが、女性は闘うことをやめません。

- **あなたは、男性と女性どちらの視点でこの映像をみましたか?**
- **あなたにとって、この女性のように闘わなくてはならない相手がいるか考えてみましょう。**

作者のズザンナ・ヤニンは数ヶ月におよぶトレーニングをしてこの撮影にのぞみました。対する相手は、ポーランドではとても有名なヘビー級のプロボクサーです。勝ち目がなくても戦いつづけること、自分からはリングを下りないこと――それは人生そのものの象徴のようでもあります。作者は、家庭内のように親密な空間(リング)のなかにおける男女の愛憎入り混じった関係性を描いたといわれています。男女間に限らず、上司と部下、親と子などのさまざまな関係性や、困難な課題に立ち向かうことなどにあてはめてみることもできるでしょう。

12　カタジナ・コズィラ
《罰と罪》2002年

実際に大量の火器、銃器を用いて、擬似的な戦闘を趣味として楽しむ人々の姿を取材しています。この人たちの「戦闘ごっこ」は、まるでアクション映画のように、本格的で危険そうです。

- **爆破や戦闘シーンをみて、どんな気分がしましたか?**
- **なぜ作者は、登場する男性たちに、女性のマスクをかぶせたのでしょう?**

戦闘の映像をみて、怖い・嫌だと思う一方で、スカッとする・興奮するという人もいるでしょう。歴史上、人は数え切れない闘いや暴力を繰り返し行ってきました。破壊や死と隣り合わせの快楽を求めることもまた、人間が心の奥底に持っている本性のひとつかもしれません。マスクは、取材対象である男性たちのプライバシーを守るためのものですが、作者はあえて若い女性をモデルにしたマスクにすることで、暴力をめぐる固定概念(ジェンダー観)を混乱させようとしています。

13　ヨアンナ・ライコフスカ
《バシャ》2009年

パジャマ姿でバッグを抱えた初老の女性が、町をさまよっています。心配した町の人の手助けにより保護されて病院へ連れ戻されますが、また抜け出してしまいます。

- **この映像を、どこからどのように撮っているか想像してみましょう。**
- **この作品はフィクション(つくりごと)でしょうか? ドキュメンタリー(記録)でしょうか?**

作者は、認知症を患い晩年を施設で過ごしたお母さんのことを想ってこの作品を作りました。娘である作家自身が高齢者風のメイクをし、お母さんの徘徊(はいかい)を再現しています。公共空間でゲリラ的に行ったパフォーマンスを通じて、お母さんの苦労や怖れを追体験しました。たまたま心配をして声をかけてきた人は、これがフィクションだとは気づきません。作者の様子を遠くから隠れて撮影したり、バッグのなかの隠しカメラがとらえた映像は、フィクションであるとともに、ドキュメンタリーでもあるといえるでしょう。

II−2

過去と未来への視点 | 2010年代以降

14　ホノラタ・マルティン
《屋上》2015年

団地の屋上のへりに立って、今にも落ちそうなほど体を前に傾けている女性(作者自身)がいます。
背後にいる人が、束ねられた髪をつかんで、なんとか彼女が落ちないように支えています。

- **ループ状に繰り返す映像と、はじまりと終わりがはっきりわかる映像との違いは、どこにあるでしょう?**
- **映像をみてどんな気分になりましたか?**

この動きが少なく、尺の短いシーンをループ状に繰り返して見せている映像は、ほとんど絵画のようです。画面からは、一歩間違えば転落するぎりぎりの緊張感が伝わってきます。作者は物語的な説明はしていませんが、たとえば急速に変化していく社会のなかで足元のバランスを失いそうになる緊張状態に重ねあわせることができるでしょう。作者は、しばしば自分を身体的・精神的な限界に追い込み、その状況で感情と身体がどのように反応をするかを試した記録を、写真や映像、ドローイングなどで発表しています。

15　ボグナ・ブルスカ
《グルンヴァルドの闘い》2011年

さまざまな映像をつなぎあわせて、ポーランドの歴史上もっとも有名な戦いを描いています。
映像の種類はいろいろですが、登場人物の服装や武器、身振りの特徴は共通しているようです。

- **どんな種類の映像が使われていますか?**
- **なぜ特定の歴史上の出来事が、メディアを換えて繰り返し映像化されるか考えてみましょう。**

「グルンヴァルドの戦い」とは、1410年にポーランド王国とリトアニア大公国連合軍がドイツ騎士団を破った歴史的な戦いのこと。この勝利によってポーランドは大国になりました。冒頭に出てくる大きな絵画は、19世紀ポーランドを代表する画家ヤン・マテイコ(1838-1893)が描いた同名の大作です。作者は、実写映画、コマ撮りアニメ、CGなど異なる映像の断片を、たくみにひとつの物語につなぎました。愛国心をくすぐる戦勝の物語は、かつては歴史画、現代では多様な映像を介して人々の意識に刷り込まれてきたのです。

16　アンナ・モルスカ
《ヘカトゥーム》2011年

皮製の奇妙な装具をつけた男性が、空っぽの古い温室のなかで所在なくたたずんでいます。男性はやがて思いがけない状況に陥ります。

- **この映像から、どんな物語を想像できるでしょう?**
- **ヴィデオが普及している時代に、わざわざフィルムで撮影しているのはなぜでしょう?**

この作品は、作者がこどもの頃に抱いていた漠然とした恐怖感をインスピレーションに作られました。主人公を演じている俳優は、事前に簡単な説明は受けたものの、具体的に何をしろという指示はないまま、即興的に、空間とたわむれています。作者は、映像ならではの表現方法を探求するなかで、言葉にならない何かを映像という言語でいかにとらえ、伝えることができるかを探求しています。あえてデジタル・ヴィデオではなく、映画フィルムで撮影することで、夢のような質感をかもし出しています。

※「ヘカトゥーム」は、元来は古代ギリシャで生贄として捧げられる100頭の牛のこと。転じて、多数の犠牲や虐殺を意味する。

17　カロル・ラヂシェフスキ
《アメリカは準備ができていない》2012年

第I章で紹介したパイオニア世代の作家ナタリア・LLについてのドキュメンタリーです。作者は、彼女が1977年にニューヨークに数ヶ月滞在していることに注目し、当時実際にどんな状況だったのか、ポーランド発のアートに、どんなインパクトがあったのかを調査しました。

- **冷戦当時の東側諸国と西側諸国との距離感について想像してみましょう。**
- **当時のニューヨークアート界の人々にとって、ナタリア・LLはどんな存在だったのでしょうか?**

ナタリア・LLは、冷戦時代に、西側と東側のアートシーンの間をつなぐ数少ない存在の一人でした。作者はナタリア・LL本人に加え、当時を知る関係者や同世代のアーティストたちに丁寧に聞き取りを行いました。複数の証言を比較対照する編集によって、当時、最先端で自由なアートが集う場所と思われていたニューヨークのアートシーンも、実は保守的で閉鎖的な面を持っていたこと、そして、アメリカと東欧圏との距離感などが浮き彫りにされていきます。

18　カロリナ・ブレグワ
《嗚呼、教授!》2018年

アパートの一室らしい生活空間で、アイマスクをつけた女性が画面の中からひたすらに「教授!」と、様々な声色で呼びかけています。用いられているポーランド語の語尾は、その教授が男性であることを示唆しています。

- **「教授!」という呼びかけ方にはどのようなバリエーションがあるでしょう?**
- **最近の作品なのに、なぜブラウン管テレビを用いて展示をしているのでしょう?**

「教授」と呼ばれているのは、作者のウッチ映画大学での指導教授で、著名な芸術家・美術史家であるユゼフ・ロバコフスキのこと。ロバコフスキは、1980年代に、カメラ越しに見る者に問いかけるような実験的なヴィデオ作品を多く手がけています。尊敬する教授から多くを学び、作家として成長してきたブレグワは、カリスマ的な師匠による芸術上の影響力から解放されるため、オマージュとしてこの作品を作りました。

19　アグニエシュカ・ポルスカ
《セイレーンに尋ねよ》2017年

目と口が沢山ある奇妙な顔がふたつならんで画面に浮かんでいます。右側の方は肌がうろこのようにみえます。
セイレーンというのは、ギリシャ神話にでてくる半人半魚(または半人半鳥)の怪物のことです。移りゆく現代ポーランドの都市風景の中を、人魚が漂いながら、さまよっているようです。

- **作者は、人魚というキャラクターにどんな意味をこめたのでしょう?**

10世紀、ポーランド王国の成立にともない、かつてあった非キリスト教的文化が消し去られた歴史や、その後も繰り返されたさまざまな侵攻や分裂、また現代にも通じる移民問題などを想起させる台詞を、人魚は断片的に語っています。「魚であって魚でない、人であって人でない」という、アイデンティティの不確定さが、社会の健忘症——歴史が容易に上書きされ、かつてあったものや人や考え方が形を失っていく危うさ——に重ねられています。人魚は、ポーランドの首都ワルシャワのシンボルでもあります。

20　アグニエシュカ・カリノフスカ
《ネズミたち》2012年

白い空間で、動物のマスクをつけ白い防護服を着た少年少

女たちが、おしゃべりをしたり、壁や床に落書きをしたりしながら過ごしています。

・登場する少年少女たちは、どんな子たちだと思いましたか?

・《ネズミたち》というタイトルからどんな連想をしましたか?

この映像は、青少年更生保護施設で暮らす少年少女たちを美術館に招いて行ったワークショップの記録です。アートや美術館は、彼・彼女たちに何を提供できるでしょうか?作者は、いつもは施設で厳しい規律のもとで管理されて暮らす彼・彼女たちに、課題を課す代わりに、目的も負荷も規制もなく安心して自由に過ごせる非日常の空間を用意しました。同時に、社会のなかでネズミのように、小さく、声を持たず、時に疎まれる存在でもある彼・彼女たちに、偏見のないまなざしを向けようとしています。

21　アリツィア・ロガルスカ
《夢見る革命》2014-2015年

薄暗いステージで、人々が催眠術をかけられています。参加者たちは、(おそらくは)無意識に近い状態で、自分が空想として思い描く理想の社会の風景をそれぞれに描写していきます。

・なぜ作者は、参加者に催眠術をかけようと思ったのでしょうか?

・自分の思う「理想の社会」について想像してみましょう。

この映像は、作者が考案し、演出を担った公開パフォーマンスの記録です。催眠術は、集中力を高める方法としてだけでなく、学習して身につけた知識や思考による刷り込みから参加者を自由にするために用いられました。参加者は、地域でさまざまな主張のもとに運動を担っている活動家の人々。理想を語るだけでなく、実際のアクションも起こしている人々がうちに抱いている理想の社会像は、しかし、どこか空虚で懐かしく、そして似通ったものでもあるようです。SFかオカルト映画のような雰囲気をかもし出しているサウンドは、教会の鐘の音を、加工して生み出された音です。作者は、表面的なイデオロギーの対立を越えて、理想的な未来を具体的に思い描くことの難しさを示しているようです。

II-3

新世代の感性と社会とのかかわり

22　アンナ・ヨヒメク&ディアナ・レロネク
《ディレクトレシィ(女性館長)》2017年

1枚のシャツを一緒に着ている女性二人が、カメラに向かって、さまざまな主張をしています。インターネット上の投稿動画のような、ややふざけたポップな作りの映像です。

・二人の女性たちは、何を主張していますか?

・同じ映像を、美術展のなかでみるのと、インターネットの動画投稿サイトでみるのとで、違いはあるでしょうか?

ある美術館の館長職に空きができ、公募が告知されたのを知った二人のアーティストは、一緒に一人の人格として立候補することにしました。映像は、彼女たちが実際に提出したヴィデオによる応募動機資料で、二人からの美術館や美術界への「改革案」が盛り込まれています。ポーランド語では、男性の館長はDyrektor、女性ならDyrektorka、その複数形ならDyrektorkiとなるところ、どれもピンとこなかった二人は、代わりに「お姫様(princess)」に使われるssの語感を加えたチャーミングなネーミングを提案しました。

23　ヤナ・ショスタク
《ミス・ポーランド》ほか

作者は、アーティストとしての自分の声を、社会に届ける手段として、さまざまなメディアを活用しています。その手段のひとつが、ミス・コンテストに入賞することです。今回は、作者自身が、東京の観客にむけて、ヴィデオガイドを作り、自分の活動について説明してくれています。

・美術と「ミス・コンテスト」の共通点はなんでしょう?

作者は「移民」や「難民」という言葉に、差別的なニュアンスがあることに注目し、アーティストとして、新しい呼称を提案したいと考えました。作者自身も隣国ベラルーシから移住してポーランドで活動しています。当事者である移民、難民のグループと議論したり、有名な言語学者のテレビ番組に出演したりといった活動も彼女の「作品」の一部です。彼女は現在、数年にわたりミス・コンテストに挑戦してきた過程とその舞台裏を、ドキュメンタリー映画として発表する準備中です。多くのミス・コンの要項には、外面的な美醜だけでなく、内面的な知性も審査の対象になると記されています。美術作品の優劣を問うときの基準として、造形だけでなく、コンセプトが重視されることに似ています。

24　ヴェロニカ・ヴィソツカ
《すべての問題の果て/ムペドツァンハモ》2018年

広い工場で、おびただしい量の中古の衣服が仕分け処分を待っています。ムペドツァンハモというのは、巨大なフリーマーケット施設があるジンバブエの街区のこと。そこには、日々ヨーロッパ諸国から大量に送りつけられてくる衣服があふれかえっています。

・これらの衣服は、どのようにして作られ、これからどうなるのか想像してみましょう。

溢れかえる衣料の多くは、先進国の消費者が、不要になった服を捨てたり、リサイクルのために無償で提供したもの。民主化を経て、東欧随一の経済成長を遂げ、高度消費社会の仲間入りをしたポーランドもまたそうした過剰な生産と消費のサイクルに組み込まれていることに気づいた作者は、この映像で、豊かさの影にある矛盾を描写しています。

出品リスト
List of Works

［凡例］
- 作品データは原則として作家名、出品番号、作品名、制作年、技法・尺数、クレジットの順に記載した。
- 所蔵先の記載のない作品はすべて作家蔵。

［Remarks］
- Captions are in the following order: artist's name, cat. number, title, date, technique/duration and credits.
- All works are collection of the artist unless mentioned.

I

限られたアクセスのなかで
パイオニア世代の映像実験｜1970-1980年代
Limited Access—Experiments by the Pioneers | the 1970-1980s
［共同キュレーター：マリカ・クジミチ｜ Co-curator: Marika Kuźmicz］

エヴァ・パルトゥム
Ewa Partum
1
ドローイング TV
Drawing TV
1976
8ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サイレント
8 mm film (transferred to video), b&w, no sound
6′01″
Courtesy of the artist

ナタリア・LL
Natalia LL
2–1
インプレッションズ
Impressions
1973
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、カラー、サイレント
16 mm film (transferred to video), color, no sound
3′46″
©Natalia LL / Courtesy of lokal_30, Warsaw
2–2
消費者アート
Consumer Art
1972
写真パネル
Photo panel
©Natalia LL / Courtesy of lokal_30, Warsaw

ヨランタ・マルコラ
Jolanta Marcolla
3–1
キス
Kiss
1975
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サイレント
16 mm film (transferred to video), b&w, no sound
1′51″
Courtesy of Jolanta Marcolla and Arton Foundation, Warsaw
3–2
《ディメンションズ》制作状況
Making of *Dimensions*
1975
写真パネル
Photo panels
Courtesy of Jolanta Marcolla and Arton Foundation, Warsaw

ヤドヴィガ・ジンゲル
Jadwiga Singer
4
ジ・エンド、ジ・エンド
The End, The End
1979
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サイレント
16 mm film (transferred to video), b&w, no sound
5′
Courtesy of Arton Foundation and artist's family

バルバラ・コズウォフスカ
Barbara Kozłowska
5
視点
Point of View
1978
写真パネル
Photo panels
Courtesy of Zbigniew Makarewicz

イザベラ・グストフスカ
Izabella Gustowska
6
相対的類似性
Relative Similarities
1980
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サイレント
16 mm film (transferred to video), b&w, no sound
4′29″
Courtesy of Izabella Gustowska and Arton Foudation, Warsaw

アンナ・クテラ
Anna Kutera
7
対話
Dialog
1973
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サイレント
16 mm film (transferred to video), b&w, no sound
7′
Courtesy of the artist

テレサ・ティシキェヴィチ
Teresa Tyszkiewicz
8
息
Breath
1981
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サウンド*
16 mm film (transferred to video), b&w, sound*
16′44″
Courtesy of Profile Foundation, Warsaw
*A fragment of a song "One Step Beyond" (1979) by MADNESS

イヴォナ・レムケ＝コナルト
Iwona Lemke-Konart
9
人間の可能性の限界
The Limit of Human Possibilities
1984
16ミリフィルム（ヴィデオに変換）、白黒、サイレント
16 mm film (transferred to video), b&w, no sound
3′01″
Courtesy of the artist

II–1

転換期
クリティカル・アート潮流とともに｜1990年代以降
Transition—In a Current of Critical Art | Since the 1990 s

ユリタ・ヴイチク
Julita Wójcik
10
芋の皮剥き
Peeling Potatoes
2001
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
10′ 52″
ザヘンタ国立美術館（ワルシャワ）所蔵作品
Work from Zachęta –
National Gallery of Art collection in Warsaw

ズザンナ・ヤニン
Zuzanna Janin
11
闘い
Fight
2001
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
9′
Courtesy of Zuzanna Janin Studio and lokal_30, Warsaw

カタジナ・コズィラ
Katarzyna Kozyra
12
罰と罪
Punishment and Crime
2002
7チャンネルヴィデオ、カラー、サウンド
7 channel video installation, color, sound
尺数多様（ループ）｜ durations variable (in loop)
Courtesy of the artist

ヨアンナ・ライコフスカ
Joanna Rajkowska
13
バシャ
Basia
2009
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
16′
Courtesy of the artist and l'étrangère gallery, London
Photo: Marek Szczepański

II–2

過去と未来への視点
2010年代以降
Perspectives into the Past and the Future | Since the 2010 s

ホノラタ・マルティン
Honorata Martin
14
屋上
Roof
2015
シングルチャンネル・ヴィデオ（ヴィデオ・パフォーマンス）、カラー、サウンド
撮影：カミラ・ショミチ｜助力：ミハウ・ズノイェク
Single channel video (video performance), color, sound
1′ 24″
Video documentation: Kamila Chomicz
With help of Michal Znojek
Courtesy of the artist

ボグナ・ブルスカ
Bogna Burska
15
グルンヴァルトの闘い
The Battle of Grunwald
2011
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー（ファウンド・フッテージ）、サウンド
Single channel video (found footage), color, sound
19′ 28″
Courtesy of the artist

アンナ・モルスカ
Anna Molska
16
ヘカトゥーム
Hecatomb
2011
シングルチャンネル・ヴィデオ（16ミリフィルムをHDに変換）、カラー、サウンド
Single channel video
(16 mm film transferred to HD), color, sound
9′ 57″
Courtesy of the artist and Foksal Gallery Foundation, Warsaw

カロル・ラヂシェフスキ
Karol Radziszewski
17–1
アメリカは準備ができていない
America Is Not Ready For This
2012
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
67′
Courtesy of the artist and BWA Warszawa, Warsaw
17–2
カロルとナタリア・LL
Karol and Natalia LL
2011
写真パネル
Photo panel
Courtesy of the artist and BWA Warszawa, Warsaw

カロリナ・ブレグワ
Karolina Breguła
18
嗚呼、教授！
Oh Professor!
2018
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
6′
Courtesy of the artist

アグニエシュカ・ポルスカ
Agnieszka Polska
19
セイレーンに尋ねよ
Ask the Siren
2017
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
8′ 30″
Courtesy of the artist and ŻAK | BRANICKA, Berlin

アグニエシュカ・カリノフスカ
Agnieszka Kalinowska
20
ネズミたち
Mice & Rats
2012
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
19′ 07″
Courtesy of Agnieszka Kalinowska and Gallery BWA Warszawa, Warsaw

アリツィア・ロガルスカ
Alicja Rogalska
21
夢見る革命
Dreamed Revolution
2014 -15
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
13′ 18″
Courtesy of the artist
日本語字幕協力：京都芸術センター

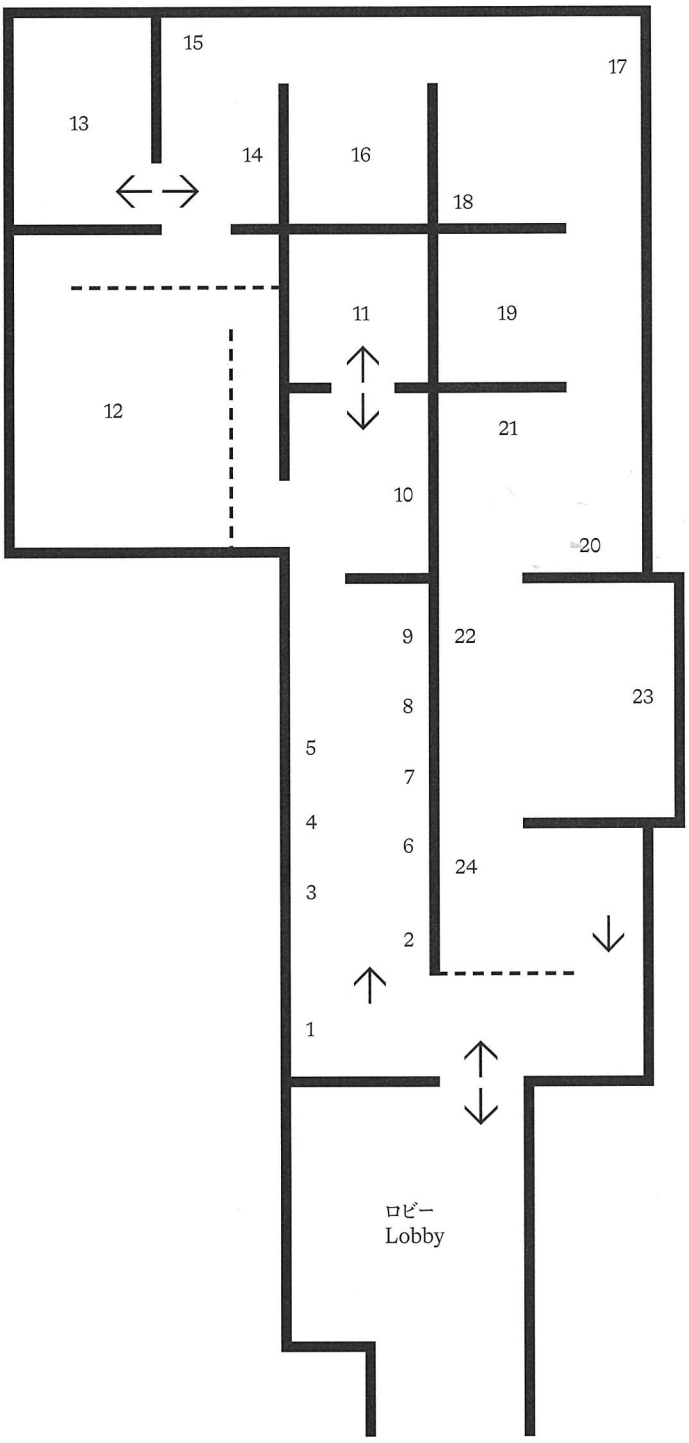
II–3

新世代の感性と社会とのかかわり
Sensitivity of the New Generation

アンナ・ヨヒメク＆ディアナ・レロネク
Anna Jochymek & Diana Lelonek
22
ディレクトレシィ（女性館長）
DYREKTORESSY
2017
シングルチャンネル・ヴィデオ（パフォーマンス・アクションの部分として）、カラー、サウンド
Single channel video (as part of a performative action), color, sound
7′29″
Courtesy of the artists

ヤナ・ショスタク
Jana Shostak
23–1
ミス・ポーランド
Miss Polonii
シングルチャンネル・ヴィデオ
（2020年完成予定長編ドキュメンタリー映画・予告編）
共同監督・撮影監督：ヤクブ・ヤシュキェヴィチ｜製作：WFDiF
Single channel video (trailer of the feature length documentary film to be completed in 2020)
Co-director/Director of photography: Jakub Jasiukiewicz
Produced by: WFDiF
3′
Courtesy of the artist and Jakub Jasiukiewicz
23–2
NOWAK / NOWACZKA / NOWACY（新・民）
NEWMAN / NEWWOMAN / NEWMEN
2017-
シングルチャンネル・ヴィデオ（TV番組抜粋）
Single channel video excerpts from the TV program
6′18″
23–3
NOWAK / NOWACZKA / NOWACY（新・民）
NEWMAN / NEWWOMAN / NEWMEN
2017-
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
5′17″
23–4
ミス・ポーランド　東京のためのガイドツアー
Miss Polonii: Guided Tour for Tokyo
2019
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
未定 TBA
Co-director/Director of photography: Jakub Jasiukiewicz

ヴェロニカ・ヴィソツカ
Weronika Wysocka
24
すべての問題の果て／ムペドツァンハモ
where all problems end / mupedzanhamo
2018
シングルチャンネル・ヴィデオ、カラー、サウンド
Single channel video, color, sound
9′45″
Courtesy of the artist



しなやかな闘い
ポーランド女性作家と映像：1970年から現在へ
［鑑賞ガイド＋出品リスト］

2019年8月発行
執筆：岡村恵子（東京都写真美術館）｜デザイン：木村稔将
東京都写真美術館
153-0062 東京都目黒区三田1–13–3 恵比寿ガーデンプレイス内
www.topmuseum.jp
©Tokyo Photographic Art Museum, August, 2019

TOP MUSEUM